



神戸大学留学生ホームカミングデイの取り組みから の一考察 : 国際高度人材のネットワークづくりの意 義と展望

朴, 鍾祐
川上, 尚恵

(Citation)

神戸大学留学生教育研究, 10:17-40

(Issue Date)

2026-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100503590>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100503590>



〔実践報告〕

神戸大学留学生ホームカミングデイの取り組みからの一考察 —国際高度人材のネットワークづくりの意義と展望—

朴 鍾祐・川上尚恵

【キーワード】 ホームカミングデイ、留学生、卒業生、大学の国際化、ネットワーク、同窓会

1. はじめに

大学における「Homecoming」とは、19世紀後半、アメリカの大学で始まったとされる。卒業生が母校に戻るイベントとして、彼らの大学や共同体への帰属意識を高めることを目的とし、発展してきた。本学の「留学生ホームカミングデイ」は、このような考え方にに基づき、「卒業後も、大学とずっと一緒!」をモットーに、卒業・修了留学生（以下、卒業留学生）を母校に招いて、在学留学生、大学の教職員及び神戸大学に関わりのある人々が集い、母校とのつながりを再確認するイベントとして2002年に始まったものである。しかし、2025年まで22回のホームカミングデイを実施して行く中で、母校とのつながりを再確認する1年に1日限りの行事に止まらず、高度人材である卒業留学生を大学につなげるためのフォローアップとネットワークづくり、さらには本学の国際交流を促進する取り組みの一つとなってきた。

「神戸大学留学生ホームカミングデイ」（以下、HCD）は、2002年に第1回が開催されて以降、3回目までは2年に1度、4回目以降は毎年の開催となり、2025年までの23年間で22回が開催されてきた。この間、ホームカミングデイは、名実ともに本学の留学生と卒業生および本学をつなぐネットワークづくりのプラットフォームとしての役割を果たしてきたが、それだけではなく、HCDは大学の国際化、国際交流、留学生教育を意識しながら、留学生を中心とした国際的知的リソースのネットワークづくりを可視化するものとして、多様な形で実施されてきた。

この22回に及ぶHCDが、本学の中でどのように位置づけられ、どのような形で実施されてきたのか、またどのような成果を生み出してきたのか、時系列的かつ体系的にまとめることは、今後のHCDのあり方を考える上で必要な作業である。またこのHCDは23年間という長期にわたり、日本の留学生受け入れ政策や大学の国際化と呼応し進展してきていることから、一大学の取り組みに止まらず、留学生を中心とした日本の大学における国際化のあり方を考える一つの事例ともなろう。

本論文では、このようなHCDの実施に至った歴史的経緯を踏まえながら、これまでHCDがどのような形態で実施されてきたかをまとめつつ、その意義を再確認し、本学の国際的プレゼンスの向上や国際的知的リソースのネットワークづくりおよび海外ネットワークづくりとどのように相互作用してきたのかを検討するものである。

2. 神戸大学の留学生教育の歴史

2-1 神戸大学の留学生受け入れと卒業生へのフォローアップの背景

まず、本学の留学生受け入れのベースとして、本学の歴史と教育の特徴を踏まえておきたい。日清戦争後の急激な経済成長と貿易拡大により、官立高等商業学校の設立の必要性が高まり、1902年、高等商業学校（後の東京高等商業学校）に続く2番目の高等商業学校として神戸高等商業学校が設立された（神戸大学ホームページ）⁽¹⁾。この神戸高等商業学校が神戸大学の前身となる。開学以来、国際貿易の担い手として国際性に富んだ人材育成を目指しており、それは神戸大学の教育憲章にも据えられている⁽²⁾。その中で、戦後留学生の受け入れは、1953年にタイから留学生を受け入れたことに始まる。その後、日本の経済発展とともに年々留学生数が増加し、1980年代に入り年間100名台の受け入れとなり、2025年には1340人まで留学生数が増えている（神戸大学企画部企画課）。戦後半世紀にわたり、概括的な数字ではあるが、延べ1万1,300人を超える留学生を輩出してきた。日本の留学生受け入れの政策を振り返ると、戦後半世紀は、受け入れ政策に重点が置かれていたが、21世紀に入り、卒業留学生に対するフォローアップにも目が向けられるようになった（朴2011）。

卒業留学生へのフォローアップの機運が高まった背景には、いくつかの要因が重なっている。一つには、対外的な要因として、世界的にグローバル化が進む中、日本で輩出した知的リソースである卒業留学生を国際社会の中で、知日派・親日派としての良き日本理解の担い手として育てること、他に国内的な要因としては、日本の企業で活躍するグローバル人材としての期待、さらに少子高齢化社会を支える人材として活躍が期待されることであった。加えて、国家戦略の中で、留学生に対して、日本社会への貢献が期待されているように、大学においても国際競争力向上が求められる中、国際交流を含めた国際戦略の中に、知的・学術ネットワークの維持や共同研究の担い手としての留学生の存在の重要性が増してきたという背景もあった。

このような国際的、社会的ニーズにより、卒業留学生の存在感が増して行く中、本学でも卒業留学生へのフォローアップの動きが出てきたのである。その留学生フォローアップの一環として、1996年には卒業留学生の情報の整理が始まり、卒業留学生名簿が作成された（朴2011）。それと合わせて紙媒体のグリーティングカードが送信されることになったが、帰国先の住所の不明確さや経費の問題が重なって、数年後にはメールによる配信に転換し、現在まで維持されている。このメールによる配信は、卒業生からのフィードバックや卒業生名簿の整理の一助ともなっている。

2-2 神戸大学の国際交流と留学生教育

国際交流や留学生受け入れのため、1977年に神戸大学では初めて学内機関として「国際交流センター」が設置され、留学生を含む国際交流を推進する組織的な取り組みが始まった。日本の大学の留学生の受け入れが進むなか、1984年には文部省（当時）の「21世紀への留学生政策の展開について」が発表され、いわゆる「留学生10万人計画」が、国の政策として掲げられた。このような国の留学生受け入れ政策の後押しもあり、本学において留学生教育の大きな転換となったのは、1993年4月に留学生センター（以下、センター）が設置されたことである。設置目的について、センター規則には、「外国人留学生及び海外留学を希望する学生に対し、必要な教育及び指導助言を行い、これらの学生に対する教育指導の発展及び留学生交流の推進に寄与すること」を目的とすると明確に規定している。センター設立によって日本語教育をはじめ、留学生教育全般の意見集約や提言、実施ができるようになり、日本語・日本文化に関する教育支援、異文化・留学生活に適応するための相談支援、卒業及び修了後のネットワーク（以下、卒業ネットワーク）作りのための基盤ができるようになった（神戸大学留学生センター 2015）。

そして、2001年1月のセンターの新棟完成を契機に、より充実した形で日本語教育や留学生教育、さらに卒業留学生のフォローアップのための具体的な動きが始まった。

2-3 卒業留学生へのフォローアップとネットワークの構築

センター新棟完成は、卒業留学生を強く意識する大きなきっかけとなった。当時は約700人の留学生が本学で学んでおり、年間約100人が卒業していたが、そのフォローアップには学部ごとの同窓会があるだけであり、特に留学生を対象としたものはなく、学生時代にできたつながりが途絶えがちであった。そこで、センターは「国

や専門を超え、互いの情報交換を活発にし、日本での生活が実り多くなるように」と呼びかけ、「在日留学生同窓会」の初会合が開催された。その会合には、在学留学生、卒業留学生、教員等関係者30名が集まり話し合いが持たれた（神戸新聞2001年9月18日）。この初会合開催を促したのは1995年に阪神淡路大震災を経験し、人とのつながりの大切さを痛感した教訓でもあった。震災当時被災留学生の支援に当たり、学生同士の横のつながりの重要性、いわゆるネットワーク型の組織づくりの有効性が認識されたのである。

このような経験を通して人的つながりが求められる中、新センターの竣工を卒業生に披露する機会として捉え、学生同士のつながり、また大学とのつながり、卒業生とのつながりなどいろいろなつながりを形にしようとする動きがでてきたのは、必然かつ自然な流れであったといえよう。

初会合には、筆者の一人である朴は当時の神戸大学大学院文化学研究科（現在の人文学研究科）の「留学生担当教官」（現在の留学生担当教員）の立場と卒業留学生の立場を兼ねて、全体の進行を担当していた。この会合では、卒業留学生同士のメーリングリスト作成、留学生ホームカミングデイの開催、国籍や専門を超えた同窓会組織の構築などが議論され、この提案の一つ一つが、その後の取り組みの道標のような形になり、神戸大学卒業留学生ネットワーク構築の原点となったのである（朴2011）。

3. 留学生ホームカミングデイ（HCD）の立ち上げ

3-1 ホームカミングデイの黎明期

上述したように、新センターの竣工を契機にして卒業生との接点づくりを進めるなかで、ホームカミングの構想が提案された。その提案を具体化する動きが明確となり、センター教員と関係者での協議を重ね、2002年11月に記念すべき1回目のHCDの実施にこぎつけた。このHCDは、まず卒業生と在学留学生、教職員の会合の場づくりを目指すことで試験的に行うことになった。しかし、試験的とはいえ、在学学生と卒業生をつなげるため1回目のHCDのコンセプトを考えることは重要であった。その結果「日本で働くということ」をメインテーマに取り上げることになったが、それには以下の理由があった。1984年の「留学生受け入れ10万人計画」の目標が2003年に達成され、バブル崩壊後の日本の企業の海外進出が著しくなるなか、受け入れ留学生が高度人材として期待されるようになった。日本社会での活躍の場の拡大という社会的機運の中で、卒業生と在学留学生の最大の接点を考えた結果、

このようなメインテーマに決まったのである。

1 回目のHCDは、2名の卒業生を招いて、彼らの体験談を中心とする講演会が開かれた。専門、国籍、世代を超えてつながり、また日本で働くという共通認識で開かれた1 回目のホームカミングデイであった。プログラムの中で、(株)オリックス・システムのプラシャント・バルデシ氏の「IT企業への就職一求められるTNCを備えた人材」、(株)剣豪集团代表取締役役会長の鄭剣豪氏による「剣豪集团一中国の総合商社を目指して」の講演が行われた(Kobe University International Alumni-net)⁽³⁾。このテーマは在学留学生と卒業留学生をつなぐ良い題材であることが明確となり、その後のHCDの方向性に示唆を与えたのである。しかし、このHCDは、前述した初会合の成果を表すものとして開催され、接点の場づくりの重要性は強く意識されていたものの、当初から定期的なものとして全体の枠組みなどがデザインされたものではなかった。次回の開催を2年後の2004年に開催することまでは決めたが、HCDの理念や枠組み、大学や関係団体とのつながりなどの整備といった新たな課題が認識されるようになったのである。

3-2 留学生ホームカミングデイの枠組みなどの構想と基礎づくり

留学生ネットワークづくりの胎動期には、前節で述べたように、「在日留学生同窓会」の初会合と1 回目の留学生ホームカミングデイが実施されたが、この動きを通してネットワークの求心点になるコアの形を作り上げること、それには大学が果たす役割が欠かせないこと、また大学側と在学・卒業留学生の両者が思いを共有することの重要性が確認された。その思いが2年後の2004年の2 回目のHCDに表された。2 回目のHCDで意識したのは継続的に行われるための基本コンセプトを定めることである。コンセプトには「人(people)」「知(knowledge)」「環流(flow-back)」といった三つのキーワードで、知の生命体を人々(大学の構成員)が循環する意味合いが込められた(朴2011)。さらに、取り組みの意味づけや大学行事としての位置づけ、今後の指針を示すものが必要となり、それを示すものとして図1のような概念図を作成した。これ以降はこ

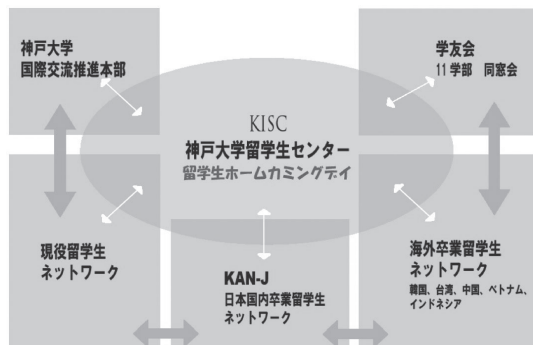


図1 留学生ネットワーク概念図

の概念図に基づき、活動を展開することになった（朴・瀬口2009）。

この図により、ネットワークに関わる組織、構成員、またつながり方、大学の構成員のそれぞれの役割などが見えてきたことと同時に、センター（図1の「KISC」は、Kobe University International Students Centerの略）がそれぞれをつなぐハブの役割を果たすものであることも確認できたのである。

組織としては、大きく、留学生（卒業留学生、在学留学生）と大学の同窓会（各学部同窓会と学友会⁽⁴⁾）、大学（当時の国際交流推進本部とセンター）の三つとなる。卒業留学生の組織は、帰国卒業生と日本在住卒業生に分かれ、帰国卒業生は海外卒業留学生ネットワーク、日本在住者は日本国内ネットワークに属するイメージである。その名称は、海外の場合は、冒頭に地域名を入れて「〇〇神戸大学同窓会」と統一し、日本国内の場合は、「神戸大学国内留学生同窓会」とし、愛称として「Kobe University Alumni in Japan」の頭文字から「KAN-J」とした。当時、在学留学生ネットワークとしては、東アジア、東南アジアを中心に6～7つの留学生会があったが、大半はそのようなコミュニティがないのが実情であった。このように俯瞰する時、大学の立場としてもっとも留学生と接点が多いのがセンターであり、センターがHCDを開催することで、全体をつなぐと同時にそれぞれの組織の可視化が図れると考えられた。

本学においては、大学の海外ネットワークの拡大と国際化を推進する中で、在学留学生や卒業留学生の高度人材といったリソースを活用する、いわば国際戦略と絡み合わせる必要があり、当時本学で国際関連業務を所掌していた「国際交流推進本部」との連携が求められることも認識された。その後、海外同窓会の発足の際には、国際担当理事・副学長も参加し、それぞれの国の研究・教育組織との連携を図ることができた。また大学の海外事務所はその拠点づくりにおいて、同窓会の海外ネットワークと連携することも視野に入れるようになった。

大学の国際戦略に加え、大学のステークホルダーの一つである卒業生を取り込むという観点から既存の大学の11学部の同窓会、またそれを束ねる学友会とのつながりも重要事項であることも認識されるようになった。卒業留学生を中心として組織される海外同窓会をしっかりと大学の同窓会の組織の中で位置付けるように働きかけること、また各国や地域で組織されている日本人同窓会組織と留学生ネットワークとの連携も促す必要性もあった。HCDの開催などにおいて、神戸大学学友会の多くの関心と支援があったのも、先に挙げた概念図を用いることで得られた効果であり、ネットワークづくりの概念を大学と卒業生、また在学留学生にも見せること

で、各組織の働きと全体の動きが共有されたことは有意義なことであった。

この時点での海外同窓会としては、1989年に海外でははじめて「神戸大学韓国総同門会」が、1995年に「台湾神戸大学同窓会」がそれぞれ自発的に発足しており、神戸大学の海外同窓会の草分けとなった。二つの同窓会に対しては、上記のような大学の海外ネットワークに関する大学の方針がすぐに伝えられ、意識共有が図れたのであった。

3-3 留学生ホームカミングデイへの本格的始動

前述したように、HCDの基本理念、連携の仕組みなどが明確に見えてきた時点で、2004年に第2回ホームカミングデイが開催されることになった。概念図をベースに、海外のネットワークづくりを意識し、中国、韓国から卒業生2名、またオランダ出身で国内在住卒業生1名を招いて開催された。2回目のHCDで大きく前進したことは、このHCDが大学全体のなかで認知されたことであった。それを象徴する形で、枝垂れ桜の記念植樹が行われた。記念植樹には、野上智行学長（当時、以下同様）をはじめ、難波昭学友会副会長、講演者（卒業留学生）、堀田博留学生センター長、在学留学生代表が参加した。この顔ぶれは、概念図に書かれた組織の代表でもあった。神戸大学の創立100年を記念して建てられた百年記念館の東側にセンター新棟が建てられており、植樹は百年記念館の北側の通りに面した場所で行われた。すでにその周りにはソメイヨシノが植えられていたが、その中にソメイヨシノと異なる枝垂れ桜を植えることで、多様性の中の調和が表された。これは本学の在学生たちを象徴するものであった。これ以降、留学生のネットワークを構成する海外、国内、在学生の三つの組織が意識され、2006年、2007年の2回を合わせて合計3回の記念植樹が行われた。

2回目のHCDは、「人」「知」「環流」をテーマにして工学研究科修士生のマルコ・ボス氏（NOISIA社長）、文化学研究科修士生の藤軍氏（北京大学助教授）、経済学研究科修士生の趙炳澤氏（漢陽大学校金融経済学部長）の3人による講演が行われた。その講演のなかで、趙炳澤氏が「学問の世界は『国家』と『国籍』を問わない。『国籍』は変えることはできるが、『学籍』は変えることはできない」と述べたことは、ホームカミングデイの意義を想起させる内容であった。この2回目のHCDは、日本国内外の卒業生も加わり、広がりをもつと同時に、大学や同窓会も巻き込み、1回目より発展した形のHCDとなった。これによって、既に組織されていた韓国・台湾の同窓会を含む留学生のネットワークが大学の同窓会の一部として、認知され

るようになった。

4. 留学生ホームカミングデイの確立

4-1「卒業留学生同窓会連絡協議会」の開催

2004年の2回目のHCDの後、さらに具体的な方向を議論すべく2005年11月12日に「卒業留学生同窓会連絡協議会」がセンター内で開催された。同協議会は、卒業留学生、在学留学生、各国留学生会、学友会、センター教員の有志によるもので、約20人が集まった。HCDが2回開催されたことでネットワークづくりへの機運が高まっていた。この会合では「留学生センターを中心とする卒業留学生のネットワーク」というタイトルで構想発表が行われた（Kobe University International Alumni-net）⁽⁵⁾。前述の留学生ネットワーク概念図が披露され、大学の国際交流推進本部、学友会、帰国留学生、日本在住卒業留学生、在学留学生のそれぞれのネットワークを緊密につなぎ合うことが示された。留学生センター長（中西泰洋）からは「国際戦略における留学生センターの現状と展望」と題して、研究・教育・連携・組織について説明され、日本人と留学生双方を含む、国際的人材の育成と国際教育について本学の方針の説明がなされた。この協議会では次の大きな三つの方針を決めた。一つ目は神戸大学在日卒業留学生同窓会の創設、二つ目は卒業留学生同窓会ホームページの構築、三つ目は翌年の第3回HCDの実施予定である。同連絡協議会会には、学友会から島一雄副会長、鈴木正二幹事が出席され、学友会との連携を一層強めることができた。

2005年11月12日の開催に引き続き、翌2006年1月14日に、神戸大学留学生センターにて再び連絡協議会が開催された。この会合は、前年の会合より少人数でメンバーも異なる顔ぶれであったが、個々の卒業留学生と大学がつながる際に必要な連絡先などの個人情報を収集する方法が中心に話された。1回目の協議会では全体的な枠組みが話されたのに対して、2回目は情報収集と卒業留学生のつなげ方を中心に意見交換が行われたが、同協議会は、国内同窓会の発足、及び第3回留学生HCDの開催など具体的な活動方針をきめる重要な役目を終え、その後の議論は同窓会やHCDの場に託し解散することとなった。2回目に議論された卒業生留学生の情報収集と情報発信は、紙媒体で作成された卒業生留学生名簿から個人情報の電子的なデータベース化への過渡期ゆえの課題であった。この課題は、のちに各部局で「帰国留学生登録」が実施されたことによって、データベースにつなげることができるようになり、新たな段階に入った。なお、卒業留学生を大学につなぐ取り組みの

一つとして、1回目の協議会の後の懇親会で、新野幸次郎前学長により、卒業生留学生の学術成果としての出版物などを集め、展示することについて提案があった。現在、卒業生から贈られた各国の出版物を集め、センター内で展示しているのもこの協議会の成果でもある。

このように2005年から2006年にかけて2度の留学生連絡協議会が開催されたことによってネットワークづくりへの意識が大きく前進することになった。留学生連絡協議会が行ってきた留学生ネットワーク構築の取り組みはその後センターが担うことになり、留学生連絡協議会はその役目を終えた。また2005年後半から2006年前半にかけては、中国同窓会立ち上げのための準備と国内留学生同窓会立ち上げを同時に進めることになった。さらに2005年に台湾同窓会を訪問し、台湾同窓会の発足と状況に関する話し合いも持たれた。

4-2 第1回大学ホームカミングデイ開催と留学生ホームカミングデイの併催

2006年は大学全体としても卒業生に対する考え方の変化が起きた年であった。それまで卒業生に関わる活動は、各学部の同窓会によって行われるのが主流であり、大学が同窓会活動に主体的に関わることはあまり見られなかった。それまでの一般的な同窓会活動とは、卒業生を中心に同窓会が組織され、卒業生同士がつながるというものであった。しかし、日本社会の一つの変化として、卒業後も大学につながりたいといった卒業生の帰属意識の高まりとともに、大学側でも大学経営のための寄附獲得や社会的プレゼンスの向上及び産学官連携を意識する中で、個々の卒業生という人的資源を重視し、大学との関係づくりを行う必要性が年々高まってきた。そこで大学全体として、学部単立での同窓会を横断的につなぐための組織として学友会を設立するなどの新しい変化が起きた。その流れの中で、HCDと並んで、大学としてもホームカミングデイを実施することになった。その結果、大学として二つのホームカミングデイを行うことになったが、野上智行学長は、HCDの実施の背景や経緯を尊重し、合併する形ではなく、それぞれ並行して開催すべきだと判断した。

大学全体の第1回ホームカミングデイは2006年9月30日に行われた。第3回HCDは同年の11月11日に開催された(Kobe University International Alumni-net)⁽⁶⁾。3回目のHCDは、野上学長の「神戸大学の現在と未来」と題した記念講演の後、「ボーダレス時代における海外同窓会ネットワーク構築」をメインテーマに異なる国と地域の6人の代表者による報告及パネルディスカッションが行わ

れた。その代表者は、①ベトナムのリ・ディン・ドン氏（ノンラン大学教員）、②インドネシアのアンダディ・ハミン・サワダ氏（ガジャマダ大学教員）、③ 中国の徐一平氏（北京外国語大学北京日本学研究中心教授）、④台湾の阮允恭氏（神戸大学台湾校友会顧問・台湾米山奨学会理事長）、⑤韓国の尹宣熙氏（漢陽大学校法学部教授、東京大学法学部客員教授）、⑥日本国内同窓会の林忠吉氏（神戸国際大学経済学部教授）であった。海外の卒業生と各国の同窓会代表者が初めて一堂に会した形であった。3回目のHCDの開催に先立ち、2005年から準備を行ってきた「国内留学生同窓会」が発足されたことと、中国神戸大学同窓会が2006年10月に発足したことを合わせ、3回目にして海外ネットワークの構築のイメージが具体的になったホームカミングデイになった。

この折、式典に先立って、野上学長、新野幸次郎学友会会長、中西泰洋留学生センター長をはじめ、各国同窓会代表6人に現役留学生会代表も加え、先に述べた2回目の枝垂れ桜の記念植樹が行われたのも、今後のHCDの方向性を示す象徴的イベントとなった。

このように大学ホームカミングデイとの併催という後押しもあり、2007年より2年に一度の開催ではなく、大学との共催という位置づけで毎年ホームカミングデイが開催されるようになった。

4-3 留学生HCDの接点づくりの取り組み

留学生HCDは、回数を重ねる中で、ネットワーク構築のプラットホームとしての理念、方向性や行動方針が少しずつ見えはじめたが、より恒久的な形で進められるために一貫性のあるテーマを見出す必要があった。そのために、まずはHCDの主役である在学留学生と卒業生留学生の接点を見出すことが必要であった。2000年代初頭、外国人留学生は日本企業が求める高度人材として捉えられるようになり、関心が高まった時期であった。卒業留学生の日本就職が多くなり、実際に採用の件数も増え始めてきた時期であった。外国人留学生の日本国内就職者数の増加は数値にも顕著に表れ、経済産業省関東経済産業局（2022）が、日本学生支援機構のデータを分析した結果、外国人留学生就職者数は2009年の8,736件から2020年には約2.6倍の23,014件に増加しており、日本企業への就職者数は卒業留学生の約37%となったという。一方、約60%の学生が卒業後の進路として日本での就職を希望しているが、その約40%が就職できていないという現状についても指摘している（経済産業省関東経済産業局2022）。このような状況を鑑み、卒業留学生と在学留学生をつな

ぐというHCDの機能から、「日本で働く」という切り口が有効な接点であると認識した。第4回HCDでは在学留学生のキャリア形成を意識し、「日本で働く」というテーマを全面に出して、「キャリアセミナー」のような形で開催された。プログラムは、2名の卒業生による講演として、①「Starting your Career in Japan」ネルソン・デクリネス氏（法学部・Wall Street Associates, フィリピン）②「中国就職最新動向」王進氏（自然科学研究科・パソナテック大連代表取締役）が行われた。さらにその後、日本の企業10社と卒業留学生の勤務する企業7社による個別相談会も行われ、多くの在学留学生が参加した。卒業留学生による個別相談テーブルでは後輩たちからの質問に先輩が具体的にアドバイスする様子が随所に見られ、まさに、ホームカミングデイの開催を意義づけるものであった（Kobe University International Alumni-net）⁽⁷⁾。



写真1 第4回HCDの会場の様子

この4回目のHCDでは、これからもこのような機会を増やしてほしいといった企業関係者からの要望があり、卒業留学生からは在学留学生に期待する声も多かった。HCDを在学留学生と卒業生との接点づくりの場として実施すること、また在学留学生に対するキャリア教育の場の提供も重要であることを認識した結果、留学生の日本国内の就職支援をHCDとは独立して開催することとした。その結果、翌年から「留学生のためのグローバルキャリアセミナー」が前期・後期合わせて年に6回開催されることになった。この中では、卒業留学生が講師として招かれ、就活の体験や日本企業で働いている経験が在学留学生と共有された。在学生と卒業生をつなぐ重要な取り組みが生まれたことはHCDの副産物として、大きな成果であった。

一方、同年の本学全体の式典のメインの特別講演で、自然科学研究科を2006年度に修了したイラン出身のシリン・ネザマフィ氏が「海を越えて、言葉を越えて」というタイトルで講演を行なったのは、二つのホームカミングデイの同時開催に相応しいもので、HCDの認知度を高める意味でも意義深いものであった。

またこの時期には、センターのウェブサイトにも、卒業留学生ホームページが開設され、様々な取り組みの情報発信ができるようになった。

5. HCD実施の枠組みと波及効果

4回のHCDを重ねる中で、明確に見えてきたものは、もっとも重要な二つの対象、つまり在学留学生と卒業留学生の関係づくりという明確な課題であった。また在学留学生の卒業後の大学とのつながりが、個人的な関係によるものだけにとどまらず、組織としてのつながりによるものへと発展させることも新たな課題であった。2006年までには、自主的に発足した韓国、台湾同窓会に加え、中国と日本国内の同窓会ができ、新たなネットワークづくりも喫緊の課題であった。卒業同窓会の整備を通して海外ネットワーク構築を実現することは、卒業生へのフォローアップのみならず、大学の拠点づくりにもつながるものである。本章では、各国・地域の海外同窓会発足によるネットワークづくりについて説明をした後、そのプラットフォームとしてHCDがどう発展していったのかについて述べる。

5-1 海外ネットワークづくりの本格化

4回のHCDの後、四つの同窓会に続く新たな同窓会の発足を模索した結果、ベトナムとインドネシアの同窓会発足を手がけることにした。2008年3月に同窓生に関する現地調査を行い、大学としての同窓会発足について現地卒業生らと相談をした上で、ベトナム神戸大学同窓会をハノイで同年8月23日に行うことになった。さらに国際交流担当理事・副学長の参加のもとで8月30日、ジャカルタにてインドネシア同窓会を発足することができた。海外同窓会発足に際して、現地での関係大学の訪問、また大使館などの日本の機関訪問を行い、発足会への参加案内や現地関連団体との協力強化も図った。これによって現地の同窓会のみならず、大学の海外とのつながりも強化することとなったのは、海外ネットワーク構築の一つの意義であるといえよう。

海外ネットワークの拠点の中心となる同窓会発足に関する考え方や進め方をベトナム、インドネシア同窓会発足を通して確立した。これをふまえてその後、2009年にバンコクでタイ同窓会、2010年クアラルンプールでマレーシア同窓会とシンガポール同窓会、2011年にブリュッセルで欧州同窓会、ヤンゴンでミャンマー同窓会、2012年にビエンチャンでラオス同窓会、2014年にウランバートルでモンゴル同窓会、2016年にプノンペンでカンボジア同窓会、2025年にマニラ郊外（フィリピン大学ロスバニオス校UPLB）でフィリピン同窓会が発足した。発足した同窓会の代表は、その年の留学生HCDに招かれ、発足報告と合わせ、同窓会旗の贈呈式を行うことが定式化され、HCDをプラットフォームとして海外ネットワーク構築を可視化する

という形が確立された。新しく発足した海外同窓会以外でも、イギリス、ドイツのように欧州同窓会の支部的な同窓会の活動を取り上げること、発足後の同窓会活動も取り上げること、組織的ではないものの、本センターの「日本語・日本文化研修生」⁽⁸⁾ プログラムに参加した卒業生のネットワークを取り上げること、複数の同窓会をつなぎ横の連携を強めたことなど、多様な形でネットワークの紹介を行ってきた。

5-2 HCDの構成とテーマ性の確立

HCDは2007年より大学ホームカミングデイと同日開催となり、毎年開催となった。大学全体のホームカミングデイとの差別化の必要性和開催頻度の増加により、HCDにどのような内容を盛り込むのか、さらに持続可能な開催のための核となる内容つまり中心に据えるコンテンツの確立が求められた。そこで三つのキーワードを企画段階で中心に据えていくことになった。一つ目は先輩と後輩との関係、二つ目は留学生（教育）を支える団体との関係、三つ目は卒業生と恩師との関係である。この三つのコンセプトを中心軸にして2008年からのHCDを構成することになり、それぞれ次のようなキャッチフレーズを設け、プログラムの構成を行なった。①「ようこそ先輩！神戸大学へ『先輩との対話』」は、多方面において世界で活躍している先輩の様々な体験から学び、在学生の将来のロールモデルとするというコンセプトである。②「ようこそ皆さん！神戸大学へ『感謝の時』」は留学生を支えるために、様々な協力を行っている団体や個人をHCDに招き、感謝の意を表すというコンセプトである。③「おかえりなさい！神戸大学へ『卒業生と恩師との対談』」は、多くの留学生が指導教員の研究指導を受け、また研究者としての道に進み卒業後もそのつながりが深いことから、留学生活の中でもっとも大事な恩師との関係を振り返るというコンセプトである。この三つのテーマから、毎年一つの柱をメインに据えて企画内容を決定することとなった。

2008年に、①の「ようこそ先輩！神戸大学へ『先輩との対話』」を、2009年に②の「ようこそ皆さん！神戸大学へ『感謝の時』」を、2010年に③の「おかえりなさい！神戸大学へ『卒業生と恩師との対談』」を実施した。メインテーマに関しては、三つの柱の他に、開催年における時事的テーマを取り上げることもあった。例えば、本センターの創立20周年、30周年記念に関連したテーマ、本センターと関わりの深い神戸大学留学生支援国際交流課外活動団体「TRUSS」や留学生家族の支援ボランティア団体KOKORONET-IN KOBEの周年記念に合わせたテーマを設けたこと

もあった。

三つの柱は、2008年の第5回開催から18回の間に、①が8回、②が4回、③が4回、テーマとなった。その他は特別企画2回となっている。割合にすると、①のテーマでの先輩との対話が44.4%、②のテーマの留学生教育貢献への感謝が22.2%、③のテーマの恩師との対談が22.2%、その他が11.1%の割合であった。具体的な内容としては、①の卒業生による特別講演が半数近いが、②と③ともある程度のバランスを取りながら全体のテーマを定めてきている。

①のテーマで特別講演に招かれた卒業生を職業別に分類すると、企業・起業33%、大学・教育41%、外交・官僚11%、翻訳家・作家11%、法曹界4%であった。神戸大学は学部より大学院に留学生が多いという特徴からアカデミックな分野に進む卒業生が多いのは当然であるが、企業・起業家も多いことや、外交官、また作家や翻訳家として活躍する卒業生もあり、多様なキャリアで専門を極める卒業生の姿は、在学留学生の良きロールモデルになっていると思われる。

その他、特筆すべきことは、22回のHCD開催の中で2回、非対面による開催があったことであった。2020年からの新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が猛威を振るった時期も、HCDは継続して開催されたのである。世界で人と人との接触、交わりが拒まれる中、それまで培ってきたネットワークを生かし、オンライン上で、6カ国による「同窓会サミット」が開催された。翌2021年も非対面による開催が余儀なくされたが、できるだけ通常と同様の形をとりながら、ネット上で可能なプログラムを工夫し、「言葉でつなぐ世界」をテーマに、ベトナム大阪総領事館主席領事の講演、落語の演目の披露、また留学生によるスピーチコンテスト、参加同窓生からのコロナ禍で支えになることばの披露など、オンラインならではのコンテンツを駆使し、YouTubeによって全世界に配信した。HCDの「つながる、つなげる」のモットーの通りに、コロナ禍の中でもHCDが力強く開催されたことは意義深いことであった。



写真2 オンライン配信での第18回HCD

翌2021年も非対面による開催が余儀なくされたが、できるだけ通常と同様の形をとりながら、ネット上で可能なプログラムを工夫し、「言葉でつなぐ世界」をテーマに、ベトナム大阪総領事館主席領事の講演、落語の演目の披露、また留学生によるスピーチコンテスト、参加同窓生からのコロナ禍で支えになることばの披露など、オンラインならではのコンテンツを駆使し、YouTubeによって全世界に配信した。HCDの「つながる、つなげる」のモットーの通りに、コロナ禍の中でもHCDが力強く開催されたことは意義深いことであった。

5-3 在学留学生のHCDとの関わり

ホームカミングデイには、卒業生を母校に招いて交流を行うという大きな趣旨が

あるが、卒業生をもてなし、HCDをより充実させていく上で、在学留学生の存在は欠かせないものである。一方、在学留学生にとっても、在学時から大学との多様な形で関わりを持つことは重要であり、彼らの大学への帰属意識をさらに高めることは大きなテーマとなる。また、学内で彼らと日本人学生の国際交流の場を提供することも必要である。

在学留学生は提供を受ける側だけでなく、様々な形でHCDに貢献できると考え、次のような役割を与えた。HCDの進行役は開始当初は教員が進行役を担ってきたが、2019年の16回目からはHCDが留学生主体であるという意味を込め、在学留学生による日英バイリンガルの司会によってHCDを進行した。進行役を教員から在学留学生の役割とすることで、HCDが学生主体であることを強調し、在学留学生の参加意識をさらに高めることができた。一方、HCDのオープニングパフォーマンスは、2016年頃までは在学留学生によるものが主流であったが、それを日本人在学生まで広げることで新たな文化交流の場が生まれた。最初はパフォーマンスができる留学生個人に依頼をしたり、留学生会からの協力によるパフォーマンスもあった。そのあとは日本文化の紹介や日本の大学の部活の紹介を主旨として、本学の学生サークルに協力を得ることが徐々に増えていった。サークルの中には、留学生も参加しているケースもあり、コラボレーションによるパフォーマンスも注目された。

HCDにおける国際交流の場として、2010年より「KU WORLD フェスタ」というコーナーを設けた。そこでは、神戸大学の主要留学生会によるブース出展や神戸大学紹介動画制作コンテストを行い、個人参加可能なものとして、フォトコンテストと写真展、神戸と神戸大学をテーマとしたスピーチコンテスト、歌でつなぐ交流のカラオケ大会、世界各国ダンス大会やゲーム大会といったものを行った。このような在学学生が参加できる多様な形のプログラムにより、在学学生の国際交流の場、学生同士の交流の場を提供してきた。KU WORLD フェスタは、もともと留学生会による協力も多くあったが、コロナ禍が明けた2022年より神戸大学生協の学生委員会(GI)が企画段階から加わり、学生目線での学生間の国際交流の企画が増えていった。

以上で取り上げたHCDの詳細な内容は、本稿末の別表「神戸大学留学生ホームカミングデイの記録資料」を参照されたい。

6. 課題と今後の展望

卒業留学生のフォローアップの取り組みは、在学中だけではなく、卒業後も交流

を継続していくための仕組みづくりである。HCDは留学生のフォローアップとして始まったが、現在ではフォローアップを超えて、卒業留学生を大学の国際競争力をより高める存在として、また国際的知的リソースとして位置づけるという重要な視点が加わった。

卒業留学生は、日本社会を担う高度人材としてだけではなく、海外でアカデミックな資質を持ち日本の存在感を高める人材として、つまり国際高度人材として見ることができる。このような卒業留学生の存在を活かし、HCDを通して培ってきた卒業留学生のネットワークを通じて、大学と海外の卒業留学生とのネットワークを構築しようとする取り組みもなされてきた。それが神戸大学グローバルリンクフォーラム（Kobe University Global Link Forum、以下、KUGL）である。海外ネットワークや様々な卒業生リソースを活用しながら、KUGL事業として2011年よりバンコク、ソウル、北京、タイ、クアラルンプール、ハノイ、台北で学術研究成果に関する講演や日本留学紹介などが実施されてきた。このような事業は、国際的な知的情報リソースである海外同窓会ネットワークや海外協定機関との連携・協力のもと、学長をはじめ神戸大学の構成員が海外に赴き、神戸大学のブランドを世界に発信するという目的によって行われたものであった（神戸大学国際連携推進機構ホームページ）。まさに大学の国際戦略、卒業留学生、海外ネットワークが織りなす取り組みであるといえよう。HCDで大学と卒業生、さらに海外ネットワークづくりに取り組んできたことが、このような形で大学の国際展開の一助となったことには大きな意義があるものである。

一方、国際高度人材育成とネットワークづくりという大きな視点からは、大学には在学留学生への教育、また日本人学生、日本人卒業生を巻き込んだ留学交流、国際交流、大学の国際戦略と連携させた仕組みづくりの強化がより求められる。その実行のためには、卒業留学生のトラックを正確に把握するための体制の確立や、海外同窓会との定期的会合や連携体制の確立が急がれる。また留学生教育の充実により、よりよい人材を輩出し、高度人材としての活躍を支援し、さらに卒業後には、卒業留学生が大学の教育研究、また日本社会で国際的な高度人材として貢献できるよう「循環型留学交流」を確かな形で作り上げることが求められる。

2026年度に23回目を迎えるHCDは、今後も大学全体のホームカミングデイと連携をとり、理念を共有しつつ、より多くの大学のステークホルダーを取り込みながらより幅広く確固たるネットワーク構築を目指していく必要がある。

注

- (1) 神戸大学ホームページ「大学概要」「沿革・歴史」「法・経済・経営学部及び経済経営研究所の前身」参照 (<https://www.kobe-u.ac.jp/ja/about/outline/history/rokkodai/>)。
- (2) 神戸大学ホームページ「大学概要」「使命、憲章、ビジョン」参照 (<https://www.kobe-u.ac.jp/ja/about/outline/mission-vision/educational-charter/>)。大学教育憲章の3の教育目的に掲げられている。
- (3) Kobe University International Alumni-net「第1回留学生ホームカミングデイ」参照 (http://www.kisc.kobe-u.ac.jp/alumni/alumni/HCD/entori/2002/11/10_The_1st_International_Student_HCD_2002.html)。
- (4) 「学友会」は、各部局の個別の同窓会をたばねる組織の名称である。
- (5) Kobe University International Alumni-net「卒業留学生同窓会連絡協議会」参照 (http://www.kisc.kobe-u.ac.jp/alumni/alumni/Event/entori/2005/11/12_International_Alumni_Network_Meeting_2005.html)。
- (6) Kobe University International Alumni-net「第3回留学生ホームカミングデイ」参照 (http://www.kisc.kobe-u.ac.jp/alumni/alumni/HCD/entori/2006/11/11_The_3rd_International_Student_HCD_2006.html)。
- (7) Kobe University International Alumni-net「第4回留学生ホームカミングデイ」参照 (http://www.kisc.kobe-u.ac.jp/alumni/alumni/HCD/entori/2007/9/29_The_4th_International_Student_HCD_2007.html)。
- (8) 「日本語・日本文化研修生」プログラムとは、日本政府の国費留学生受け入れプログラムの一つであり、1年間日本の大学で日本語能力や日本文化理解向上のための教育を受けることができるプログラムである。

参考文献

- 経済産業省関東経済産業局 (2022) 『教育機関における外国人留学生就職支援ガイドブック』「1章 外国人留学生の就職率」pp.2
- 神戸新聞 2001年9月18日朝刊「異国で学んだ仲間久々再会、神戸大に留学生同窓会」
- 神戸大学国際連携推進機構ホームページ「神戸大学グローバルリンクフォーラム (KUGL)」<https://www.office.kobe-u.ac.jp/ipiep/kugl/> (最終閲覧日2026年1月11日)
- 神戸大学企画部企画課 『神戸大学データ資料集2025—データと資料が語る神戸大学

の今の姿』 https://www.kobe-u.ac.jp/sites/default/files/doc-page/2025-12/datashiryousyuu_2025.pdf（最終閲覧日2026年2月7日）

神戸大学ホームページ「大学概要」 <https://www.kobe-u.ac.jp/ja/about/outline/>（最終閲覧日2026年1月11日）

神戸大学留学生センター（2015）『学内共同利用施設等の組織に係る評価結果』
<http://www.kisc.kobe-u.ac.jp/research-publication/research-publication.html>
 （最終閲覧日2026年1月14日）

朴鍾祐（2011）「第9章 大学や財団における修了生フォローアップ制度の事例 第1節 卒業留学生フォローアップ事業の取り組み ―神戸大学留学生ネットワーク構築を中心に―」『各国政府外国人留学生奨学金等による 修了生へのフォローアップ方策に関する調査研究 ―主要な各国政府、海外の主要大学の取り組み―』 p.16-23

朴鍾祐・瀬口郁子（2009）「神戸大学の留学生ネットワーク構築の取り組みと展望」『神戸大学留学生センター紀要』第15号 pp.51-73

Kobe University International Alumni-net, <http://www.kisc.kobe-u.ac.jp/alumni/alumni/Top.html>（最終閲覧日2026年1月11日）

別表：「神戸大学留学生ホームカミングデイの記録資料」

	年	卒業留学生講演等/講演者 (修了または在籍部局)	その他イベント
1	2002	●講演 ①「IT企業への就職-求められるTNCを備えた人材」プラシャント・バルデシ氏（文化科学研究科）、 ②「剣豪集団 - 中国の総合商社を目指して」鄭剣豪氏（法学研究科）	●交流会
2	2004	●講演「人・知・還流」 ①マルコ・ボス氏（自然科学研究科・NOISIA社社長） ②藤軍氏（文化科学研究科・北京大学助教授） ③趙炳澤氏（経済学研究科・漢陽大学校金融経済学部長）	●記念植樹 ●報告 「留学生センターの現状と展望」（留学生センター長） ●交流パーティ @ ランス・ボックス ●留学生によるアトラクション

3	2006	●パネルディスカッション「ボーダレス時代における海外同窓会ネットワーク構築」各国、地域6代表者による報告及び討議 ①リ・ディン・ドン（自然科学研究科・ノンラン大学）、② アンダディ・ハミン・サワダ（医学系研究科・ガジャマダ大学医学部）、③ 徐一平（文化科学研究科・北京外国語大学北京日本学研究所教授）、④阮允恭（経営学研究科・神戸大学台湾校友会顧問・台湾米山奨学会理事長）、⑤ 尹宜熙（法学研究科・漢陽大学校法学部教授、東京大学法学部客員教授）、⑥林忠吉（経済学研究科・神戸国際大学経済学部教授）	●記念植樹 ●記念講演Ⅰ「神戸大学の現在と未来」（神戸大学学長） ●記念講演Ⅱ「これからの大学学友会と国際的ネットワーク」（神戸大学学友会会長） ●交流パーティ
4	2007	●講演 ①「Starting your Career in Japan」ネルソン・デクリネス氏（法学部・Wall Street Associates, フィリピン） ②「中国就職最新動向」王進氏（自然科学研究科・パソナテック大連代表取締役）	●留学生ネットワーク紹介 ●企業個別相談会、卒業生企業相談会 ●交流パーティ
5	2008	●講演「先輩との対話～ようこそ先輩！神戸大学へ～」 ①田漢哲氏（法学研究科、中国）、②シリ・ネザマフィ氏（自然科学研究科、イラン）、キム・ジン氏（文学部、韓国）、③ビラッパン・ビーラスレシュクマル氏（法学研究科、インド）、④シゲル・アサノ氏（経営学研究科、Bolivia） *在学留学生①陳瑩氏（中国）、②ミルゾヒド・ラヒモフ氏（ウズベキスタン）	●韓国文化研究会によるサムルノリ ●留学生ネットワーク紹介①海外ネットワーク紹介（ベトナム神戸大学同窓会 レ・ホン・ハイ氏（経済学研究科）、インドネシア神戸大学同窓会ユーリ・セトヨ・インダルトノ氏（自然科学研究科）②現役留学生紹介（韓国・台湾・中国・ベトナム・インドネシア） ●「知り合う、学びあう世界」①ライブパフォーマンス中国太極拳、ベトナムの踊り ②各国/地域文化紹介プラザ（韓国・台湾・中国・ベトナム・インドネシア・留学生支援2団体） ●インターナショナルオープンパーティ★お茶のおもてなし
6	2009	●感謝状の贈呈「ようこそみなさん神戸大学へ～感謝の時～」 ①森本直明氏（レジデンス元相談主事）、②留学生ホストファミリー交流センター、③国際ロータリー第2680地区米山奨学委員会、④KOKORO-NET in神戸 *留学生会代表挨拶アボン・シルビ氏（人文学研究科）	●バリダンス ●海外ネットワーク①上海：森田タカシ氏（中国神戸大学同窓会・上海華東地区代表）、②タイ：ソムキティ・シンスックバムブン氏（工学研究科、タイ神戸大学同窓会会長） ●ライブパフォーマンス①「内モンゴルの踊り」ウィリス氏（理学部在学留学生）②「アंकラン」インドネシア留学生会 ●各国/地域文化紹介プラザ（ベトナム、インドネシア、タイ、韓国、中国、Truss、被災地学生交流事業） ●インターナショナルオープンパーティ★餅つき ★お茶のおもてなし
7	2010	●講演「おかえりなさい神戸大学へ～卒業生と恩師との対談～」 ①鄭剣豪氏（法学研究科）×新野幸次郎名誉教授（経済学研究科） ②マリア・レイナルス・D. カルロス氏（経済学研究科） ③村戸ドル氏（医学研究科）×山本 節 名誉教授（医学研究科）	●フラメンコ マーゼン氏（国際協力研究科、イエメン）、田中よね氏（日本語非常勤講師） ●海外ネットワーク紹介① マレーシア：ロン・コ・ホン氏（経営学研究科、神戸大学マレーシア同窓会会長）②シンガポール：石川浩通氏（神戸大学シンガポール同窓会会長） ●KU Worldフェスタ：ファッションショー、二胡の演奏、お餅つき、留学生会ブース ●KU Alumni Night

8	2011	●講演 陳海騰氏（経済学研究科 1997年修了・Baidu, Inc.駐日首席代表） *「在校生と先輩との対談」ブライアン・ウィリアムズ（人文学研究科 M2）、李瑞雪氏（国際文化学研究科 M2）	●留学生による和太鼓演奏 ●海外ネットワーク紹介①ヨーロッパ：小池勇氏（工学部卒業・カネカファーマヨーロッパ N.V.社長）、②ミャンマー：ティン・エイ・エイコ氏（文化学研究科・THINMYANMAR Language Centre長） ●KU Worldフェスタ：近隣大学生によるパフォーマンス①中国川劇「変臉」江玉氏（龍谷大学）、②ミャンマー民族舞踊「Thin Kyan Moe」Kay Khing氏（京都産業大学経営学部）、③中国民族舞踊「一枚の葉」張玲氏（神戸大学農学研究科） ●留学生による各国/地域ブース（中国、韓国、台湾、インドネシア、タイ、トルコ、パラグアイ、ベトナム、ミャンマー）
9	2012	●感謝状の贈呈「ようこそみなさん神戸大学へ～感謝の時～」 ①木下記念事業団、②神戸国際協力交流センター代表留学生：①ルーディ・チミンチ・エキャロンゴ（医学研究科）、②張文遠（経済研究科） ●講演「留学交流の歴史と展望 神戸大学110周年を迎えて」 瀬口郁子氏（神戸大学名誉教授）、ソムキティ・シンスックバムブン氏（工学研究科・タイ神戸大学同窓会会長）、曹洙鎔氏（医学部・韓国神戸大学総同門会元会長）	●在学生によるオープニングパフォーマンス（留学生による和太鼓演奏「留鼓太鼓」） ●海外ネットワーク紹介：台湾神戸大学同窓会（劉慶瑞会長 国際協力研究科） ●留学生による伝統衣装ファッションショー ●留学生センター 20周年記念フォトコンテスト授賞式 ●KU Worldフェスタ：ライブパフォーマンス（和太鼓、マレーシア、インドネシア、ベトナム、タイ）
10	2013	●講演「神戸大学と私」 ①セルダヘイ・イシュトヴァーン氏（文学研究科・駐日ハンガリー特命全権大使）、②徐一平氏（文化学研究科・北京外国語大学北京日本学研究中心長教授）、③フレント・ロディカ氏（国際文化学部・バベシュ・ボヨイ大学文学部准教授、ルーマニア） ●座談会 上記講演者、ネザマフィー・シリシ氏（自然科学研究科）	●在学生によるオープニングパフォーマンス（留学生による和太鼓演奏「留鼓太鼓」） ●海外ネットワーク紹介：台湾神戸大学同窓会（劉慶瑞会長 国際協力研究科2000年修了） ●留学生による伝統衣装ファッションショー ●留学生センター 20周年記念フォトコンテスト授賞式 ●KU Worldフェスタ：ライブパフォーマンス（和太鼓、マレーシア、インドネシア、ベトナム、タイ）
11	2014	●講演「おかえりなさい神戸大学へ～卒業生と恩師の対談～」 ①ティン・エイ・エイコ氏（文化学研究科、ミャンマー）×西光義弘神戸大学名誉教授 ②繆大福氏（工学研究科、中国）×遠藤秀平工学研究科教授 ③呉美英氏（法学研究科、韓国）×芹田健太郎神戸大学名誉教授	●海外ネットワーク紹介：モンゴル神戸大学同窓会（ダミデンスレン・ダワドルジ会長） ●KU Worldフェスタ：J-POPカラオケコンテスト ●留学生会によるライブパフォーマンス：マレーシア、ベトナム、カメルーン、インドネシア
12	2015	●講演「先輩との対話～ようこそ先輩！神戸大学へ～」 ①数仲馬恋典（スーチュー・バレンティン）氏（自然科学研究科・福岡工業大学 工学部教授、ルーマニア） ②マリア・カルロス・レイナルス氏（経済学研究科・龍谷大学国際学部教授、フィリピン） ③胡金定氏（文化学研究科・甲南大学国際言語文化センター教授、中国） ④マルツェリナ・レシニチャク氏（日本語・日本文化研修コース・ニコラウス・コペルニクス大学日本言語文化研究室講師、ポーランド）	●在学生によるオープニングパフォーマンス（留学生による和太鼓演奏「留鼓太鼓」） ●神戸大学名誉博士称号授与式：チョウミントン氏（経済学研究科1986年修了、ヤンゴン経済大学名誉教授） ●海外ネットワーク紹介：中国神戸大学同窓会 広州・香港地区（謝崇寧代表） ●KU Worldフェスタ：薛燕氏、インドネシア留学生会、中国人留学生学生会

13	2016	●感謝状の贈呈「ようこそみなさん神戸大学へ～感謝の時～」[兵庫県私費外国人留学生奨学金] (産業労働部国際局長水口典久氏)	●在学生によるオープニングパフォーマンス (クラリネットとオーボエの演奏) ●海外ネットワーク紹介: カンボジア神戸大学同窓会 (メイ・カリアン会長) ●KU Worldフェスタ: 在日カンボジア留学生協会、中華民国同学会、インドネシア留学生会、神戸地区中国人留学生学友会、関西マレーシア留学生会、神戸大学韓国留学生会
14	2017	●講演「おかえりなさい神戸大学へ～卒業生と恩師の対談～」 ①ルチアン・ギョルゲ (自然科学研究科・日産自動車、ルーマニア)、アンドレイ・ニコロフ (自然科学研究科・Apple社、ブルガリア)、白浜文章 (自然科学研究科・ドイツ・ジューゲン大学) × 上原邦昭教授 (システム情報学研究科)、②ブレット・クーパー (法学部・オーストラリア大使館公使、オーストラリア) × 芹田健太郎名誉教授 (法学研究科、国際協力研究科) ●Alumni Networkingドイツ神戸大学同窓会活動 藤井隆 (工学部)、番場仁美 (経営学部)	●卒業留学生によるオープニングパフォーマンス (POPPINダンス) ●海外ネットワーク紹介: ドイツ神戸大学同窓会 (藤井隆氏、番場仁美氏) ●KU Worldフェスタ: 動画「神戸・神戸大学の魅力」(韓国、タイ、台湾、マレーシア、インドネシア、中国の留学生会)
15	2018	●第15回留学生ホームカミングデイ記念特別企画「神戸大学における留学交流・教育を考える～第一線で活躍する卒業留学生と恩師を迎えて～」 ①ソーピットヴァッティウォン・ユッパワン氏 (留学生センター・チュラーロンコーン大学准教授、タイ)、②ランカスター・ローソン氏 (留学生センター・東京海上日動火災保険株式会社、イギリス)、③神戸大学留学生交流支援サークル Truss: 李炫庸氏 (文学研究科・P&G Japan、韓国)、高原有香 (兵庫県高校英語教員、日本)、④KOKORO-NET in 神戸: 田中圭子氏	●在学生によるオープニングパフォーマンス (神戸大学よさこいチーム山美鼓) ●海外ネットワーク紹介: 英国神戸大学同窓会 (鷲地隆継氏) ●KU Worldフェスタ: KUファッションコレクション
16	2019	●講演「ようこそ先輩！神戸大学へ～第一線で活躍する卒業留学生を迎えて～」 「六甲の山並みから見た日本と世界～神戸大学での学びと日本文化」ダミアン・フラナガン氏 (文学研究科博士課程2000年修了、作家・評論家、イギリス)	●在学留学生による日英バイリンガル司会 ●在学生によるオープニングパフォーマンス (神戸大学邦楽部) ●海外ネットワーク紹介①神戸大学留学生西日本同窓会: 陳林会長 (自然科学研究科)、②神戸大学留学生東日本同窓会: ビーラッパン・ビーラスレシュマル会長 (法学研究科) ●神戸大学留学生支援サークル Truss による企画「ジャパンフェスタ」エルバン・フォーシェー氏 (フランス) による日本茶紹介
17	2020	●講演 ①「神戸大学の現状と同窓会との連携」品田裕神戸大学理事、③「神戸大学基金 留学生教育支援事業」河合成雄神戸大学国際教育総合センター長 ●神戸大学留学生同窓会サミット①中国: 徐一平会長、②ミャンマー: ティン・エイ・エイコ会長、③モンゴル: トゥルム・バーサンジャブ会長、④東日本: ビーラッパン・ビーラスレシュマル会長、⑤西日本: 陳林会長、⑥タイ: ヨンラタナシリ・バンディット会長	●神戸大学紹介 (動画) 「神戸地区中国留学生学友会」による神戸大学紹介

18	2021	●講演「ようこそ先輩！神戸大学へ～第一線で活躍する卒業留学生を迎えて～」 「日本とベトナムを繋ぐ外交官の仕事」LE HUY HOANG氏（国際協力研究科・在大阪ベトナム社会主義共和国総領事館首席領事、ベトナム）	●在学留学生による日英バイリンガル司会 ●在学生によるオープニングパフォーマンス（神戸大学落語研究会） ●KU Worldフェスタ：日本語スピーチコンテスト ●海外ネットワーク紹介①ラオス神戸大学同窓会：パンパキット・オンパンダラ氏（国際協力研究科）、②カンボジア神戸大学同窓会：エイン・ソチエット氏（国際協力研究科）、韓国神戸大学同窓会：パクサンウ氏（経済学研究科）、④東日本留学生同窓会：フランシスコ・ジョセ・シルバ・ダ・コンセイサン氏（経済学研究科）、⑤西日本同窓会：陳林氏（理学研究科）
19	2022	●講演「ようこそ先輩！神戸大学へ～第一線で活躍する卒業留学生を迎えて～」 「Successful Business in Japan Find Your Passion and Get Started」ファリザ アビドヴァ氏（留学生センター・Trusted 株式会社CEO、ウズベキスタン）	●在学留学生による日英バイリンガル司会 ●在学生によるオープニングパフォーマンス（神戸大学アカベラサークル「ガーナガーナ」） ●海外ネットワーク紹介（動画）ラオス：ケオピラウオン・ブーベット氏（国際協力研究科・ラオス国立大学経済経営学部学部長）、甲藤瞳氏（国際文化学研究科、国際交流基金） ●KU Worldフェスタ：世界のゲーム大会
20	2023	●感謝状の贈呈「ようこそみなさん神戸大学へ～感謝の時～」 ①千趣留学生奨学財団、②島一雄氏 ●第20回記念パネルディスカッション「第20回留学生ホームカミングデイ記念パネルディスカッション：グローバル教育センター創立30周年を振り返る」 瀬口郁子氏、中西泰洋氏、水野マリ子氏（元留学生センター名誉教授） ●日研生プログラム20周年記念座談会「世界で活躍する日研生」 ソービットウツティウォン・ユッパワン氏（留学生センター・チュラロンコン大学、タイ）、トドル・ヴァシレブ氏（国際文化学研究科）	●在学留学生による日英バイリンガル司会 ●在学生によるオープニングパフォーマンス（神戸大学応援団総部） ●KU Worldフェスタ：世界のダンスを踊ろう
21	2024	●講演 「言語と異文化への愛」ガブリエル・アルバレス・マルティネス氏（国際文化学研究科2014年修了、スペイン） ●神戸大学留学生支援・国際交流課外活動団体 Truss創立30周年記念プログラム 座談会 神戸美徳氏（法学部2000年卒業）、Trussメンバーの平石孝也氏（理学部在学中）、納堂美生氏（国際人間科学部在学中）	●在学留学生による日英バイリンガル司会 ●在学生によるオープニングパフォーマンス（神戸大学軽音楽部JAZZ） ●KU Worldフェスタ：カラオケコンテスト ★ONE KOBE FAMILY 国際交流パーティ
22	2025	●講演「ようこそ先輩！神戸大学へ 卒業留学生が語る大阪万博2025 ～世界と日本の架け橋に～」 ①「神戸大学から外交の道へ」ソルトバエヴァ・ジャミリヤ氏（留学生センター、キルギス） ②「オーストリアから神戸、そして世界へー日本との架け橋が築いた私の道」ポーラウフ・サンドラ氏（留学生センター、オーストリア）	●在学留学生による日英バイリンガル司会 ●在学生によるオープニングパフォーマンス（フェイス・タン氏 国際文化学研究科、白井望人氏、アンチャジュン氏） ●海外ネットワーク紹介フィリピン神戸大学同窓会：ゲイ・パレー会長（医学系研究科）、アルビン・タビオ氏（理学研究科） ●KU Worldフェスタ：ハロウィンファッションショー

A study Based on Kobe University's Homecoming Day Initiatives for
International Students
—The Significance and Prospects of Building Networks for Highly Skilled
International Professionals

PARK Jong Woo
KAWAKAMI Naoe

This paper examines the development and significance of the Kobe University International Student Homecoming Day (HCD), initiated in 2002, from the perspective of building networks of globally competent human resources. Originating in late nineteenth-century American universities, the concept of “Homecoming” was designed to strengthen alumni affiliation with their alma mater. At Kobe University, HCD began as a follow-up initiative for international graduates. Over the course of 22 events held across 23 years, however, it has evolved beyond a once-a-year reunion into a sustainable platform for networking among international alumni, current students, faculty members, and the university community.

By tracing the historical development and organizational transformation of HCD, this study situates the initiative within the broader context of Japan's international student policies and university internationalization strategies. The analysis demonstrates that HCD has contributed not only to maintaining alumni ties but also to repositioning international graduates as valuable global intellectual resources, thereby enhancing the university's international presence. Furthermore, through its interaction with overseas initiatives such as the Kobe University Global Link Forum (KUGL), the alumni network has become organically connected to the university's international strategy and global outreach.

Looking ahead, the institutionalization of systematic alumni tracking, strengthened collaboration with overseas alumni associations, and enhanced education for current international students are essential for establishing a sustainable “circular model” of international exchange. The case of HCD offers

an important model for Japanese universities seeking to cultivate and mobilize global talent networks.